

近世日本梵語学史の研究

——寂厳の「獅子吼章」について

小 島 通 正

寂厳の略伝

寂厳の伝記は弟子、寂津の画いた画像の賛が適切と思われるのでその賛文を読み下すことにしたい。

和上の法の諱は寂厳、字は諦乗、俗姓は安富氏、本州、足守候の家士にして元禄十五年壬午、九月十七日の誕なり。幼にして出塵の志有り、年甫めて九歳、吉備の普賢の超染律師に礼し、薙髮改服し四度の灌頂を修し、灌頂壇俗に登り、ここに四方に周游し、歳は二十年の崎なり、元文、改元、丙辰、洛西の五智山に躋り、曇寂上人に謁し弟子の礼を執る、提胡の一流祕軌を伝え、六年辛酉、泉州家原寺において重ねて具支の灌頂を上人より授く、同年請に應じて都羅島宝島寺に住持し、蘭若大いに無上の法輪を転ず。宝曆十年庚辰の春、予、後の地に遊び道場を莊嚴し宗極の印璽を伝う、是において本流の一家、能事おわれり、明和四年丁亥、宝島の神

足を文敞闍梨に讓附し、倉敷の玉泉寺に退隱す、八年辛卯、微恙に染り終に起たず 八月三日溘然として玉泉寺の丈室に示寂す その著述するところ、大悉曇章稽古録、悉曇字紀大觀、梵本阿弥陀經私記、同般若心經私記、すべて若干卷、皆、声明の学者の為にす。重ねて鏡みるに今ここに補処の闍梨絵、和上の頂相、遠く予に請うて讃をつくる、法契、辞すべからず筆を援る。

賛にいわく

秘密乗の教、我が門、宗を得、師や卓犖にして梁棟となる高く影弼を推して大いに法輪を転ず 宝島の月、朗らかに玉泉の風清し、七十に示寂す 千載の流芳、儼然として儀表、輝映、碧寥なり

安永四年乙未三月、南紀、根領の学頭僧正、常明七十四翁、拜し誌す。

寂庵の著書

私は不勉強で寂庵の著作すべてに目を通してはいない。しかし幸いにも渡辺頼母、高楠順次郎、釈子真光の三先生が「僧寂庵」（昭和八年七月発行、昭和五十四年八月復刻）、「日本梵語学史」（遺稿）、「寂庵尊者、書写本、著述本、目錄」（昭和二十六年六月調査）という書物をものしておられるのでその全貌がうかがえると思う。

先ず渡辺頼母著「僧寂庵」の第十一、著作の項（四十二頁—四十七頁）を見ると「寂庵の述作の多くは、梵学か或は音韻に関するもので、古書の註釈ものが多い。既刊未刊を合せると相当の数である。左にその一般を示して置く」と前置して書名と巻数と巻尾の年号等とを紹介しておられる。即ち「一行禪師字母表考訂」、一卷、寂庵が悉曇研究第一の著述で、享保五年に稿成ったもの故、十九歳の時である。しかし刊行せられたのは後の事で、巻尾に「享保五年歲宿庚子六月閏毫於備中連島宝島寺松石亭沙門寂庵識」としてある故、連島に居住して、脱稿し刊行したものである。次に「梵字悉曇稽古録」二冊、この著作は巻尾に次の如く誌してある。享保二十年六月 沙門寂庵、同夏六月中旬 閏毫於備中海蔵精舎沖虛亭 延享五年首夏上梓、故に享保二十年に脱稿したものを、延享五年になって京都と大阪との書肆から出版してい

る。海蔵寺というは、浅口郡黒崎村南浦にある寺ならん。以上の様な具合に「大悉曇章、本末」一卷、「梵唐阿弥陀經大觀」一冊、「悉曇十八章表」一冊、「梵漢助字大觀」一卷、「反切二字辨」一卷、「般若心經梵唐大觀、上下」二卷、「梵唐阿唐阿弥陀經」、「梵字法身偈大觀」、「獅子吼章」四卷、「梵漢音韻考、上下」二卷、「梵字相通例」、「声明書論」、「梵語類集」、「梵文雜記、上」、「平仮名片仮名異音漢音」、「注釈字母表不考訂」、「考訂八轉声略頌」、「慈恩伝八轉解第一卷」、「善男子有十四音名為字義」、「十四音名字本」、「悉曇十八章略頌」、「梵字悉曇章提引」、「悉曇合論」、「悉曇字記大觀」上中下、三卷、「悉曇暗推記」、「大悉曇章私記」、「息災梵語私記」、「說本私記」、「說本追記」、「宗要提引」、「秘密法教」、「真言宗教宗義」、「註釈不稽古録、上下」、「讚述二教義」、「雜記」二十卷、「松石余稿」二卷、等々書目を列挙してある。

次に高楠順次郎「日本梵語学史」（遺稿）第四、六十四頁には寂庵の小伝を箇条書きし、続いて寂庵の著述、三十四部（梵語関係のみ）の書名と巻数とを列挙している。即ち「一行禪師字母表考訂」一卷、「大悉曇章稽古録」二卷、「悉曇字記大觀」三卷（上、中、下）「梵漢助字大觀」一卷、「悉曇電論」一卷、「梵語類集」一卷、「梵漢音韻考」二卷、「梵字相通例」一卷、「梵文雜記」一卷、「悉曇暗推記」一卷、「悉曇章私記」

一卷、「大悉曇章私記」一卷、「梵唐心經大觀」一卷、「梵字法身偈記」一卷、「悉曇十八章略頌」一卷、「考訂八轉声略頌」一卷、「悉曇私記提引」一卷、「声明学手鏡」一卷、「梵本阿弥陀經私記」一卷、「般若心經私記」一卷、「梵唐対訳阿弥陀經」一卷、「梵唐阿弥陀經大觀」六卷、「寂嚴記白表紙」三十三卷、「普賢行願贊梵本」一卷、「獅子吼章」一卷、「梵語千字文釈義」一卷、「反切二字辨」一卷、「悉曇講演日記」一帖、「慈恩伝八転解」二卷、「阿弥陀經梵唐略釈」一卷、「梵唐阿弥陀經文句」一卷、「梵字悉曇章提引」一卷、「悉曇字記略釈」一卷、「幻耳不」二卷（上、下）等々である。続いて釈子真光編「寂嚴尊者、目錄」書写本、著述本（遺稿）昭和二十六年六月調査、を繙ひもとこう。これには寂嚴の百八十一部の書名が見られるが、その中、真言宗關係をのぞいた梵語關係の書物は二十五部ある模様である。即ち年代別に書目が挙げられ、享保年間（一七一六—一七三六）に八十部、元文年間（一七三六—一七四二）に四十七部、寛保年間（一七四一—一七四二）に二十四部、延享年間（一七四四—一七四八）に三部、寛延年間（一七五二）に三部、宝暦年間（一七五四—一七六三）に十六部、合計百八十一部が明和年間（一七六四—一七七〇）に八部数えられる。就中、ここでは梵語關係のみの書名と手記年代とを誌しておこう。即ち「悉曇章鈔」（享保、一八、五）、「涅槃經文字品音義」（享保、二、三、二三）、「悉曇字記鈔、第二、第四」

（享保、二〇、八、一七、一八、二七）、「普賢行願讚梵本」（享保、二〇、一一）、「一行禪師字母表」（元文、一、六、四）、「梵漢音韻考、上下」（元文、一、一〇、一二）、「梵唐文字」（元文、三、二）、「涅槃經悉曇章」（元文、三五、七）、「梵漢阿弥陀經」（元文、三、七、七）、「梵文雜集、上」（元文、五、三、二四）、「梵文通同考、上下」（元文、五、五、一六（二〇））、「梵唐対訳阿弥陀經」（元文、五、九、三）、「悉曇合論」（延享、一、六、一五）、「悉曇章稽古録、上下」（延享、五、七）、「獅子吼章」四卷（寛延四、三）（五十歳）、「慧琳涅槃經音義」（宝暦四、三、一六）、「悉曇字記大觀」三卷（上、中、下）（宝暦八、一）、「般若心經梵唐大觀」二卷（上、下）（宝暦二、六）、「梵本般若心經」（宝暦二、六、中包）、「反切二字辨」（明和、一、八、九）（六十三歳）、「梵唐阿弥陀經大觀序」（明和四、一〇、（五、一〇））、「反切義」（明和一、八、九）（六十三歳）、「三五摩多」（明和三、八、一）、「梵字法身偈大觀」（明和四、一〇、二二）（六十六歳）等々がそれらである。叙上、渡辺先生は二十八部、高楠先生は三十四部、釈氏先生は二十五部を調査報告されている。しかし現存しているものの正確な数はどうであろうか。今後の調査が待たれるものである。

獅子吼章

この書物については高楠順次郎「日本梵語学史」四、六十

四頁にその巻数を一卷と誌されている。しかし渡辺頼母先生は「僧寂嚴」四十四頁に四卷、釈氏真光先生も「調査目錄」、十頁に四卷と書かれている。私の調査では、卷第一は八十一枚、卷第二は五十枚、卷第三は七十七枚、卷第四は八十四枚の四卷であつた。従つてこの書物は獅子吼章四卷といふべきであらう。

さてこの書物の内容とはいへば、八轉と字界、字縁とである。八轉とは名詞の格変化、所謂八轉声のことであり、字界は語根、字縁は語根につける添加辞のことである。従つてこの書物は梵語文法書といふべきものである。

ところでこの獅子吼章、四卷、二〇八枚を四百字詰原稿用紙、十六枚に収納することは到底不可能である。従つて玆ではこの書物の始終を紹介し、それに私見を加えることのみにとどめておきたい。

先ず獅子吼章、卷第一、備中都羅沙門寂嚴撰す と書き始め、続いてこの頁は七行、十九字からなつてゐる。

西域之語法声有_二八轉_一字有_二界縁_一說梵藉者要_レ□_レ之而解文義其書以_レ不_二具_一婦_三于此_二則學_一□_レ難矣起_レ自_下玄_上并_レ詛_二之_一於前慈恩_レ伝_中之於后而后諸家_レ伝_中文_中星_中出_レ靡_レ不_レ研_二究_一其_レ繼_一不_二畢_一備_レ尚著明何況周流布乎吾東方千有余年此學若停絶偶有_レ由_二伝_一文_中望_中其_レ延徑_一不_レ踐_二於_一并_レ師_一之論場欠_レ登_二於_一基_一之學壇終少注心于此頗有年矣頃欲_レ究_レ微_レ啓_レ幽_レ風_一□大義_一邊_レ域寒

次頁より九行、十九字で書かれ上部の欄には訂正の文句が誌されている。

郷之縑細之足觀乏_二師友_一之起_レ□疑思交蒸雲沸峰起靡_レ不_二辭窮屈_一而知_レ非_二斯道_一之不_レ可_レ至

行愈遠斯言堪_レ復_レ學_一之為_レ趣_一以_レ勇往不_レ已_レ為_レ心達之要_一豈有_下百舍_上不_レ重_レ爾而能_レ至_レ遠者_一耶此字之不_レ與譬諸有_レ道而人之不_レ行道終_レ如_二荒野_一無_レ徑路_一偶欲_レ着_レ鞭而行_一秦棘_レ前_レ梗_レ不_レ知_レ所_レ之_レ茫然_一哭_レ窮途_一若有_レ人_一進_レ啓_二玄_一并慈恩之芳躅_一每駱駝_一於其問_一秦棘之障_レ行者不_レ有_レ是因_二人_一履_レ其路自通西

*二師□之於此取宝般若珠於提河之源瑜伽鏡於都史之空以迷者自使人到彼無_レ倖_レ借_レ為_レ書_一之

可_レ行_レ遂_レ則_レ至_レ如_二与_一梵人_一交_レ臂_一言_一咲_一亦或有_レ之_一夫提河含_レ潤_一流_一翻語_一於般若觀史垂_レ照懸明鏡於瑜伽玄并慈恩弘_二之_一於_二澆季_一使_レ下_一絕域之人_一解_レ二_レ休_一倘鳥言_一之□而知_レ所_レ以_レ為_レ梵典之襟帶其功無_二言_一可_レ喻_一初如_レ指_レ說其物即今_レ体_一是名_二体_一声_一此声随_レ詮_二各_一各_一事_一語末必転而至_レ七則說_レ尽_レ一切言論之分齊_一呼_レ声_一用_レ稀_一更無_二別義_一合_レ之_一名曰_二八轉_一此其大例也日

本支那之語未必有_二助声_一以導訓義_一与_レ彼稍相似_一而語聲_レ異聞_一其_レ匡_レ会_二三國_一之風大凡相同蓋自然之理也西天_一之与_二吾邦_一絶遠_一東□西_一歐洋路万里各有_二天_一一方_一方物常不_レ通情態又難_レ知故不_レ易_二曲論_一細談_一但有_二支那國語_一三藏所持梵本及大小顯密之翻訳幸派_二伝_一吾邦_一

其中雖三七例文義彰々然、可ニ体認ニ自ニ世間捨ニ此學ニ說ニ梵本ニ者不
レ能下彼此相映起解從頭直下円轉流利聳レ聞而退不識ニ何語ニ因
レ此舉レ往勸レ今從事助宣雖ニ魯拙ニ弗レ無ニ復微意ニ也竊以吾邦古
有下到彼習ニ其口業知ニ造字法ニ洞達ニ字義句義ニ而后翻伝ニ者ニ梵唐
雙存増レ之以ニ和訓ニ即其審詳至レ如下直接壞於彼ニ不レ見ニ中間森
漫吞下天以ニ平常語言ニ談話ニ其遺韻延及於今一解如嚼雪、夫西
域世尊之教以ニ聲明ニ為レ本若離ニ聲明無由起教故判「声字」為ニ
教体ニ雖ニ其說精妙ニ下愚難入ニ語唯是語言所謂穠漫多声汎余平
語ニ說ニ尽一切法門ニ也從下移ニ於支那ニ翻レ彼易此全由ニ此方訳
語ニ而通暢シ以流布為レ此聲明之根幹殆如弃而不取至ニ新訳唐梵
必対日浅旧情不レ移終不レ慮下西域法門之根幹支那日本流伝之枝
葉ニ是故世間但知ニ枝葉之訳語ニ未レ知ニ根幹之聲明ニ也玄奘三藏於
レ彼研究大小乘經論能知ニ根幹ニ也為弘通東婦如下尼拘律陀之
枝植ニ之於心地ニ接ニ其種ニ而帰上為ニ將來翻訳講演如根生幹長ニ
慈恩伝レ之後人學レ之如ニ枝葉茂盛豈非此喻哉後之學レ此者与下
由ニ枝葉ニ會ニ此理不レ如レ由ニ根幹ニ解精妙ニ知ニ其精妙ニ也雖下人出
塵劫之季地居閻浮之窟上下以ニ絶遠ニ為ニ妨三乘一乘十二分教淺
深重々随ニ耳目之及彰ニ咸ニ聲明之功學者調達於此則學興教
明而后能知下玄奘慈恩及吾疏家為ニ万世之根幹今日之隋珠趙璧上
時膺昌平之化天下學士文思大進弗レ無ニ和民之識見ニ
勤加精進ニ日不ニ暫捨則必至ニ其奧隋珠趙璧自在□予輩欲ニ學
之不已稿成贈ニ之於同志ニ以為得ニ隋趙璧ニ之弄引上庶乎學勇ニ于
此不レ廢也矣此章分為二一八囀章二界緣章

近世日本梵語學史の研究（小島）

○八囀章

大文分レニ、一本說ニ伝說一本說者初標ニ瑜伽論

以上が獅子吼章、冒頭の序文である。

次に獅子吼章、卷第四、界緣章第二を点説してみよう。

文に三を分つ。初めに釈名、二に元由、三に明相、今初
に、俱舍論第九にいわく、此の中の縁起は是れ何の句義ぞ、
鉢刺底は是れ至の義、医底界は是れ行の義、先ず助力に由り
て界の義転変す。故に行は至に由りて転変して縁と成る。光
記にいわく鉢刺底は是れ至の義是れ字縁なり医底界は是れ行
の義、是れ字界なり。論にいわく 參は是れ和合の義、喼は
是れ上昇の義、鉢地界は是れ有の義なり、合昇を藉るあり転
変起となる。此の有法縁に至り已るに由って和合昇起する、
是れ縁起の義なり、光記にいわく參は是れ和合の義、喼は是
れ上昇の義、此の二は是れ字縁なり、鉢地界は是れ有の義、
是れ字界なり。

解している。此の中、縁起等とは文に釈すこと後の如し、
今、界縁の名を釈せん、夫れ字界字縁とは西方の声明、造字
の軌法なり、界縁、相助けて語を成す。おもうに一切名句に
字界あり縁語を將いて助けて字縁となし界縁相助合し其義顯
成す。鳩いわく字界はいう駄なり、字縁は用なり。俱舍、正
理、及び諸家の釈、界を駄となし縁を用となすの限量なし、

是れ汝の独断、光師は正理論の文を解していわく、二十二根、各事の中に於て増上の用を有す、増上はこれ何の義ぞ、即ちこれ大勢用あり、相極し明顯す まさに増上と名づく、この増上の義は界義顯成す、界は是れ鉢の義、此の文の明かすところ大勢用あり即ち最勝自在、これ伊地界の義、相極し明顯す 即ち照灼明了なりこれ忍地界の義、これ増上と名づく、見るべし二種界の中に於て鉢用彰灼たり。界を鉢となし縁を用となすの説あることなし。初学つまびらかに知るべし。

下略。就中、次のような用例が見られる。

字界— 伊地— i di	字界— 忍地— nim di	字界— 医底— i ti	字界— 鉢地— pa dhi
字縁— 因檀底— i ndam ti	字縁— 地逸底— di i ti	字縁— 盃利底— pra ti	字縁— 参唄— sam u
界縁相合— 因姪唎焰— i ndri yam	界縁相合— 因姪唎焰— i ndri yam	相合— 盃利底医底— pra ti i ti	相合転成— 参牟播地— sam pa dhi
訳曰レ根	訳曰レ根	訳曰レ縁	訳曰レ起

字界— 未底— ma ti	字界— 地— vi
字縁— 毘— vi	字縁— 振多— vi nta
合成— 毘未底— vi ma ti	合成— 駄南— da nam
訳曰レ疑	訳曰レ静慮—

寛延四年竜集辛未三月

濡毫於備中州 都羅矢上山宝島寺

松石亭沙門 寂嚴識

さて以上、獅子吼章、四巻の始終を管見したが、私に思うに八轉声の理解はさておき、名詞と動詞の区別が不明なところ、又、動詞（十羅聲）の語根、語基、語尾と人称、数、時などを含めた総合的な考察が不十分なことなどが見られる。しかしこれらの事柄は梵語の資料不足な当時としては止むを得ない結果と考えられる。（未完）

（龍谷大学教授）